

どすこいライヴをやるということ

どすこいライヴをやるぞやるぞと言
出したには、言い出したなりの訳が
ある。クソ暑い七夕まつりのころに、真清
田神社裏の土俵なんかで、素人ばかりが集
まってライヴをやろうという、その訳だ。

七夕まつりで、僕らも僕らなりの遊び
をしたいなあ、まず思った。自分
たちの街で、自分たちが作る、自分たちの
まつりを、自分たちで楽しみたいのだ。

場所は、この街の人が誰でも来られる
ような、いい所をずっと探していた。
駅から歩いて行ける場所、説明しやすく
て、お金がかからない場所。そんな気持ち
で自転車に乗っていた二年前、あの土俵
に出会った。(と言うか、再会した。) ゆれ
る葉っぱの向こうで、土俵は、たおやかな
風情をしていた。しっとりとした静かなその様
子は、ずっと昔も、二年前も、今も変わら
ない。土俵は立派な屋根が乗り、一段高く
なっていて、周りには芝生の観覧席があ
る。これはまるきり野外音楽堂ではないか
と思ったのだ。土俵で音楽会なんて、結構、
前代未聞ではないだろうか。

アコースティックな音楽が、土俵には
よく似合う。近くのお家に迷惑がか
からないよう、小さい音の音楽しかでき
ないのだけれど、土俵を見ればきつとわか
ってもらえる、あそこで演る音楽は、やっ
ぱり、やさしい生の音楽だ。

準備作業は、素人が集まってやるのが
いい。ドタドタしたやり方で構わな
い。むしろドタドタした感じが、あの、の
んびりした公園には似合うようでもある。
そして何より、お金をかけたくない。色ん
な人に頭を下げて、スポンサーを見つけ、
お金を集めて、業者を使ってやるのが多分
賢い方法なのだろうけれど、でもそれは僕
らの中に何も残してはいかない。僕らはこ
こで取っかいて、失敗もして、でも何とか
ライヴをまとめあげて、この街の中で、こ
の街の人と一緒に、この街でしかできな
い、この街のおまつりをやりたいたいのだ。

ライヴがはねた夕暮れに、ビールをぐ
っと呷りながら、また来年もやろう。
またここで楽しもうと言いたい。それ
には、誰にも余計にお金を使わせないこと
がとても大切だ。魂の自由さにあふれた小
さなおまつり。お金をかけない中で、どん
なことができるのかという、実験の場、楽
しみの場、発見の場。僕らはそいつを、あ
の土俵の周りで手に入れた。

出演する人には、音楽が上手な人も下
手な人もいるに違いない。文化？的
レベルで言えば、決して高度なものではな
い。しかし、高等で高価なものをパックで
持ち込む事や、あるいは閉じた場所で内輪
だけが味わったりすることよりも、ひよつ
とすると“どすこいライヴ”の方がブンカ
的かもしれない。当たり前な生活の場であ
るこの街の、気にもかけなかったあの場所
で、すぐ近所の彼・彼女が、何だか一生懸命
歌っている。自分の街の、自分とよく似
たあの人の演奏を見る事は、また別のイン
スピレーションを作り出すことになると思
いたい。

→ のライヴを作り上げていく事は、こ
この街の人と人との繋がりの中で、ど
うも薄ぼんやりしてしまっていたところ
を、もう一度何とかしてみようとする事
のような気もする。

来年も、その次も、土俵で、あるいは他
のところで、色々な人が、その人なりの小
さなおまつりを、自分の背丈にあった形で
繰り広げたらどんな素晴らしいことだろ
うと思う。この街に惚れ直す人だつて、少
しは増えるかもしれない。

そんな小さなおまつりの一つとして、
何とか“どすこいライヴ”をやりたい
ぞと考へながら、生暖かい今年の一月
に、本町通のアーケードを自転車で走り抜
けて市役所に向かった。土俵が使えるかど
うかの相談を皮切りに、その日、今日の“ど
すこい”な活動は始まった。

途端に僕は、色々な人に出会い始め、あ
るいは土俵と同じように、色々な人と再会
し始めたのだった。

98年夏 星野“放胆屋”博